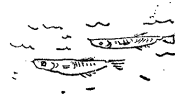


放 つ



“放つ”と聞いたら涙が流れた。“放つ”

という言葉から来るイメージは、“放つ”

側の愛の決断と、放たれる側のいたいけな、ういういしい姿、勇気とよるこびを

感じるからであろいか。

この世に生を受けて以来、全心全霊をもつて、慈くしみ育てて来た幼な子を、

始めて自分の手元から離して、幼稚園なり保育園なりに入れる時、時が来たのでそうしなければならぬ愛ゆえの決断が

あって“放つ”勇気が与えられる。

子供たちよ

はるかな世界に飛びたつてゆく子供

達よ

母は、だから今日一日を

最善に生きてゆきたい

あの丘に咲き匂う菫

あの堀のほとりに花開く桜

あの空に浮かぶ雲のように

水 藤 昭 子

あの枝にさえずる小鳥

主人のあとを追って一心に走ってゆ

く

あの犬のように

母はきょう一日を

真実な者でありたい

これは、子育てに忙しい頃の日記の一

頁であるが、“放つ”日を思いみつ、

母は一日一日を子供達と共に生活してゆくのである。

“放つ”とは、この両者が美事に別れ、自立へと出で立つことであるから、ひき離す為のもう一つの力は必要としない。

しかも、その度に経験する感動は、人間が愛に於て浄化され、美しくされてゆく尊い機会となるのだ。子を放つばかりではなく、親である自らもまたそのように

放たれて来た歴史がある。あの町、あの丘、あの電車道、神経を緊張させた通園通学の道、子捕りを恐れた昭和初期の子供も、交通災害に脅やかされている現代の子供も、その緊張は同じである。放たれた世界で出会う種々な出来事は、最初短時間ずつであって、母の愛にかけもどって浄化されるがそれが次第に複雑になり、時間も長くなり、思考も知恵も深くなって、自分のうちで大かたの浄化は出

来るようになる。やがて彼等は幼い日々からの道程で全く自立し、放たれて出でゆく日を迎える。その時彼等は、自覚するしないにかかわらず、何者かに対して自らもまた“放つ”使命に立たされているのである。だから“放つ”業は人の業ではなく、もつと永遠の光の中に存在する業なのであろう。

神は光のない所に光を放ち、植物を生き繁らせ、空には鳥を、水には魚を、野に獣を放たれた。そこをエデンと名付け、人を創造して住ませ、人にこれらすべての者を収めさせられた。しかし、この信頼関係を損う事態が引き起こされ、人は神に対して罪を犯した。そして、エデンから追放された。しかしやがて罪からの解放者があらわれる。彼は神に対して世界人類の罪の贖いとして死に、義に甦って、永遠の生命に人類を解

放する力を持っている。それが神と人間の間に設けられた真実の道、救いの道である。

人の教育に心を用いる時、この事がはつきりしていないと、道に迷うことになる。迷うことも悪くはないが、そのまま迷いっぱなしでは、人の教育は真理からはずれてしまう。迷う時にも、どこから来てどこに行くのか、という指針がはつきりしていなければ、救われる時を失ってしまう。

“地球は青かった”と、最初に人工衛星に乗ったガガーリン宇宙飛行士は、感嘆の声を発した、と聞いている。神の創造の御業は、果しくなく美しく、輝やかわたっているに違いない。その御業の中に、可能とされている自らの存在を思い、最善に真実に生かされてゆく道を見つめている。(長野・聖ミカエル保育園)